

児童養護施設等感染症対応力底上げ 事業報告

徳島県看護協会 AWAナース
感染管理認定看護師
平岡 広美

児童養護施設等感染症対応力底上げ事業

- 1 委託元 徳島県 未来創生文化部 次世代育成・青少年課
- 2 業務実施期間 令和2年8月1日～令和3年3月31日
- 3 委託目的

児童養護施設等は、適切な感染予防対策を行った上での事業継続が求められているが、職員は感染予防のための標準予防策を必ずしも習得しておらず、感染対策に関する不安や疑問を抱えて業務にあたっており、精神的にも多大な負担となっているため、医療や感染症の知識を持つ看護師を定期的に派遣し、感染予防対策の助言指導や相談窓口を設置する。

また、濃厚接触児童の受入れを行う際には、健康観察等の個別的な対応の充実や医療機関等との迅速な連携を図る事業を担い、施設職員の業務負担の軽減や感染症対応力の底上げを支援する業務を委託する。

業務内容

- 施設等における衛生指導
- 入所者及び職員の健康管理、相談対応
- 電話等による感染暴威係の相談対応

徳島県看護協会より資料提供

2

対象施設

圏域	担当者	施設種類	施設名	一時保護施設
東部 3名* 1名西部と兼任		児童養護施設	阿波国慈恵院	濃厚接触児 有症児童等 「感染疑い児」 場所は非公表
			常楽園	
			徳島児童ホーム	
			鳴門子ども学園	
		児童自立支援施設	徳島学院	
		ファミリーホーム	ファミリーホームたなか	
		一時保護所	中央こども女性相談センター	
南部 4名		自立援助ホーム	児童自立支援援助ホームゆめ	
		児童養護施設	たちばな学苑	
			宝田寮	
西部 4名*		ファミリーホーム	ファミリーホーム高橋	
		児童養護施設	加茂愛育園	

10名(保健師、看護師)が3圏域に分かれ担当

3

感染対策からみた児童養護施設の特徴

子どもたちにとって家庭（マスクなし）

- 成長発達過程にある3歳～18歳の男女、自立度の幅がある
- 養育環境の影響により心身のケアが必要な子どもがいる
- 子どもだけにすることができない
- 通学、アルバイト等に外出、家族と外泊をする（マスク着用）

職員にとって勤務場所（マスク着用）

- 介護施設のように口腔ケアや喀痰吸引など濃厚な処置はない
- 食事、入浴、寝かしつけなど躰や世話のため長時間過ごす
- 子どもがCOVIDのため入院した場合、付き添う可能性もある

4

児童養護施設で予想されること

1. 濃厚接触者の発生（施設外でのCOVID患者との接触）

- ・ 子ども：14日間の個室隔離
- ・ 職員：14日間の出勤停止
→ 発症した場合、施設内に拡大する可能性

2. COVID発症（子どもまたは職員）

- ・ クラスター発生の可能性
- ・ 濃厚接触者：ユニットフロアや施設全体、複数の職員
→ ゾーニング、勤務体制の変更、勤務職員の減少
事業継続の問題

5

感染対策支援

1. 現状把握・問題点の抽出、相談
2. 持ち込み防止、異常の早期察知
訪問者リスト（体温、名前、時間、連絡先）
職員・子どもの健康チェック、職員の体調不良時の報告
3. 拡大防止：正しい知識を提供し、職員・子どもの意識向上
手指衛生の環境整備・指導、食事時の注意、環境整備
4. 発生時の感染対策
ゾーニング、PPEの備蓄、着脱訓練
5. マニュアル作成：情報収集の方法



8月より2名で訪問、研修時は4名等
1~2回/月、11月からは1~2回/2ヵ月

6

持ち込み防止 健康チェック表

氏名	性別	体温		症状	備考
		朝	夜		

氏名、体温、日時、氏名、朝、夜、症状、備考

提案により施設が作成

- ・ 子ども、職員用
- ・ 体温記入
症状は有に○
- ・ 1週間1枚にまとめ、俯瞰で把握できる
- ・ 陽性者発生時、保健所への提出書類にも活用できる
- ・ 訪問者は別様式

7

子ども研修：手洗い等



8

職員研修: 個人防護具、ゾーニングなど



フェイスシールドはクリアファイルで作成

ガウンは、レインコートで代用

→使いすらいちその後ガウンも購入手袋に四舌八舌



ユニット隔離入口

読売新聞 取材 PPE研修会や施設へ

9

事業の感想

10/27報告会・子ども未来応援室資料より一部改編

- ・ コロナ関係で不安に思うことも多かったが、直接指導・助言をもらうことで、改めて分かったことや知ったこともあり、とても有難い。
- ・ 施設内を丁寧に視察し詳細な指導、正しい知識の習得や具体的な相談をすることができた。
- ・ 感染者が出た際にはかなりの手間を有することがわかり、予防の重要性に気づけた。
- ・ 手洗いや手指消毒など、毎日複数回行っている予防に対する意識が向上した。
- ・ 職員向けの講習会により危機意識の向上を図ることができた。

10

結果および課題

- 施設や職員間で、COVID感染対策に対する温度差がある
通常業務の上にCOVID対策による業務負担
- 子どもや職員研修（PPE着脱・手洗い）が意識づけのきっかけとなった
- 施設により、PPEの入手、隔離個室の整備状況（トイレ、浴室の有無など）に差がある。間取りの違いも大きい。
→施設に合わせた個別対応
- 家庭と同じ施設の感染対策（ゾーニング、PPEの着用）は、病院や介護施設の方法を用いることができない場面がある
→感染対策の基本を踏まえたアレンジが必要
- 県から施設への通知文書や厚生労働省のホームページなどの情報を十分活用できていない
→具体的な情報提供、情報収集の方法の提示

11

今後の目標

- 正しい知識・情報の提供、収集方法
 - 全ての職員がリスクと必要性を認識し、他人事でなく自分事として、自主的に考え動けるようになること
- ↓
- 自施設にあったCOVIDマニュアルを作成し活用できる
 - 職員や子どもの感染症に対する不安を軽減し、COVID発生時の影響を最小限にすることができる

職員や子どもたちにとって
親しみがあり、頼りになれる存在になりたい



保健師・看護師・さまざまな分野の豊富な経験を生かし、三人寄れば文殊の知恵・三本の矢の如く協力し、少しでも健康のお役に立てればと活動しています。

12